銃剣少年と双銃少女

偽者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銃剣少年と双銃少女

【Ｎコード】

Ｎ７２４０Ｙ

【作者名】

偽者

【あらすじ】

時は西暦二〇一一年、四月七日。この日、高城堅二（たかしろけんじ）は友人との模擬戦を終え、魔法生徒育成国立高等学校・空峰学園２２６クラスにて、朝のＨＲ前の時間をいつも通り爆睡して過ごしていた。が、何やら静まり返った教室の雰囲気を感じ、ふと顔を見上げると、そこにはどう見ても十歳程度の少女が。あれ？　と明らかな違和感に首を傾げる堅二の前で、彼女は口を開き――

※この作品はＳＳ捜索・投稿掲示板Ａｒｃａｄｉａにも投稿させていただいてます。

第序章・二人の初動（前書き）

文章や内容に対する感想や意見など、優しくても厳しくてもいいので貰えれば幸いです。

不定期更新になると思います。

では。

第序章・二人の初動

守りたいとそう思って、
でも自分の力が信じ切れない時、
心にのしかかる重みをどうすればいいのか――

違和感に、彼は目を覚ました。
まだ目の辺りに野暮ったい感じがするが、真っ暗な闇の中で何度かまばたきをすれば視界もハッキリしてくる。
同時、寝呆けた頭にも直ぐに電気信号と血液が忙しなく駆け巡り始め、複雑な思考が出来るようになった。
起きた頭でまず考えることは、

……さて、俺は今何を……。

寝ていた。
そう答えは直後に出るが、答えはまだ続く。
確かに寝ていたことには寝ていたが、

……朝のＨＲ前に、疲れてて……。

机に両腕と上半身を押し付け、崩した腕組み状態の腕を頭部の支えに寝た。そこまで思い出した。
そして思い出した通り、自分の腕は額の下にあり、視界は腕が顔の周りを囲んで居るため光が入らず真っ暗。辛うじて机の木目が認識出来るぐらいだ。
己の状態を、今だ目が覚めてから微動だにしないまま感覚だけで確認して、

……というか身体の節々が無駄に痛いんだが……！？　あのアホ

の所為か！

今日の早朝のことが頭に浮かぶ。

一応中学時代から友人となっている身体が無駄にデカイアホ野郎と模擬戦をしたのだが、結界があるとはいえ環境破壊上等な攻撃を数百単位で放って来るのだからもう始末に終えない。模擬術式を使用してても痛いものは痛いし、死ぬ時は死ぬというのがあのアホは分かってないんじゃないかと思う。後、模擬戦という自覚があるのかと。

普通の人間なら万回くらい死んでるんじゃないかという猛攻に、なんとか生き延びるという意味で耐え切ったが、代償は肉体の隅から隅まで駆け抜ける打撲の痛みだ。

あの野郎今日の昼『エターナル飲料研究会』考案の『黒焦げのナニカジュース』を一気飲みさせてやると、復讐を密かに考えつつ、

……じゃなくて！　あのアホのことはどうでもいいんだよ！

思考が一足飛びで過去へとぶっ飛んだのに気がつき、慌てて思考を戻す。

問題なのは身体の痛みや早朝の出来事ではない。

問題は、

……今、何で俺は起きたか、だ。

結論し、彼は耳をひそめる。

魔法は使っていない、素の聴力だが、それでもたかだか六、七メートル四方の教室内における音を聞くには充分だ。

耳の鼓膜に届く音は、殆ど無い。沈黙の音とも言えるシーンとした無音が耳に届くだけ。

朝のＨＲ前、先生からの話を聞くための沈黙だと考えれば普通な

らおかしくはないが、

……このクラスの奴等が、素直に静かになる筈がねぇ……！

過去から現在までの記憶が、頭の中を高速で流れて行く。

去年八月に試験があり、約半年程準備期間としてこの学園に関する規則や自分達が持つ権利を学んだり、生徒会及び委員会のメンバーを決める選挙会などがあったが、その間にクラスメイト達との交流もあった。

その際、彼は特に誰と話した訳ではないが、それでもこの２２６クラスにアホの友人含む少々頭のネジが五本程抜けてるどころか宇宙人辺りに入れ替えられてないかと思うような人物が大量に居るということは、教室の後方から眺めるだけでも良く分かる。

四六時中本を読んでたり、ヘッドホンで音楽を聞いたりする者が居て、かと思えばパソコンを扱いながら意味分からない言動をする奴が居たり、何やら漫画を描いてる女子も居るし、教室の中なのにサングラスをかけてたりゴーグルつけてたりスカーフ巻いてたりする者、明らかに小学生にしか見えない少女に飛びつこうとする変態男、他様々な常識的に見ておかしい者達がこのクラスの大半を占めていた。

……今ザッと挙げてみたけど、本当にこのクラスおかしいぞ！？

そんな、直球に言って頭がイかれてるとしか考えられない者達が居る自分のクラスで、完全な沈黙などあり得ない。

精々黙ることはあっても、本やらヘッドホンやらパソコンやらを扱う者が絶対に居るので、何らかの物音がするのは間違いないだろう。

しかし今どれだけ耳の感覚を鋭敏にしても、物音一つ聞こえることはなかった。

……どういう、ことなんだ？

せめて先生からの話ぐらい聞こえてもいいのに、本当に何も聞こえない。たとえ耳を塞いだとしても、ここまで見事に何も聞こえないというのはそうそう無いだろう。まるで一人残らず自分の周りから人が消えたかのようだが、肌が感じる幾つもの気配がそれを否定する。

そして、肌で感じる物がもう一つある。

視線だ。

街中で目立つ格好や物を持っていた際に集まる視線の圧力が、此方へと向けられている。

身を圧迫するような、急かすような、身体を震わせるような視線。

……いや、違うか。

圧力を身に感じて、しかし彼は違うと思った。

感じる圧力の焦点、視線が見てるものが違う、と。確かに視線は自分の近くを見ては居るが、自分を見てはいない。

ここまで考えて、何故起きたのかということに対する結論が、ようやく出た。

……俺の近くに全員を沈黙させて注目を集める程の『何か』があって、俺はその『何か』に向けられた視線の所為で起きたってことか。

これだけの無音の圧力をかけられたら、どれだけ徹夜をした後の爆睡中でも起きる自信がある。

机にうつ伏せのまま彼は思って、

……起きるか？

そろそろ狸寝入りを止めるべきだろうかと考える。

いい加減感じる視線が鬱陶しくなって来たし、眠気ももう既に掻き消えてしまった。今からもう一度寝るのは肉体的にも状況的にも難しい。

本音を言うと何となくこのままスルーしてしまいたかったが、この視線の重圧を無視して平然と出来る程、彼は心が強くはなく、馬鹿でも無かった。

だから、顔を上げる。

うつ伏せの状態から身を起こせば、視界は天変部分から白く染まって、光に馴れた目が色を捉えてゆく。見えるのは、三日前から正式に通うこととなったベージュ色を中心に構成された教室の姿だ。付属するように、机や椅子、黒板などの物体も認識。

教室の風景が徐々にはっきりと、瞳から脳へと入り込み、

「……は？」

驚愕した。

唖然とした、と言ってもいい。十五年間の人生でも、ベスト十入り出来るレベルの驚きだった。

彼は前方を凝視したまま口を魚のようにぽかんと開き、目を見開き、自分に出来る限りの方法で驚きの感情を見せている。

周りでは同じように、驚きに差はあれど、感情で言う衝撃の表情をしたクラスメイトや先生の視線が彼と同じ方向を見ていた。

だが彼の視界にそんなクラスメイトの姿は入らない。いや、入ってはいるのだろうが、気にするだけの余裕が彼に存在しなかった。

驚きの原因に目を捉えられ、それ以外を見たり理解したりする脳の処理能力が残っていない彼は、その驚きの原因を今一度よく見る。

どう見ても十歳程度にしか見えない少女が、其処に居た。

年齢は十歳程だろうか。全体が小柄で、百七十五センチある此方の三十センチぐらい下、百四十センチ程しか身長が無かった。

両腕は腰に当てられ、身に纏うは学校指定のブレザー型制服。ピッタリサイズなのであろう藍色の上着と赤のリボン、灰色のミニスカートで構成されたそれらは、彼女の身体を外の目から完全に守っている。大きく露出しているのはミニスカートから覗く細長く白い足くらいだ。

肩の上で切り揃えられた髪は輝きながらも柔らかそうで、美しいというよりも若々しさというものを感じさせる。色は世界何処でも発生すると言われている茶色で、アジアでよく見られる黒髪には無い明るさを持っていた。

対して瞳の色は緑。これもまた髪に劣らない輝きをしていて、さながら宝石のように煌めき、星のように優しげな光を持っている。ただ瞳は多少細められ、注視という形で此方を見ていた。

雪のような白い肌で大部分を構成された表情も、やはり多少顰めるように力が入っていて、桃のような水っ気を持つ薄いピンクの唇も、何かを堪えるように引き結ばれている。

そんな、冷淡な顔ではなく笑顔でさえ居れば写真集のモデルどころか子供アイドルとしてデビューしていてもおかしくはない、茶色と緑の美少女が自分の目の前、五十センチと離れてない場所に居る。

と、ここまで眼前に仁王立ちした少女を観察して思い、

……誰だコイツ！？

一番に湧き上がった疑問がこれだ。

美少女か少女かどうかは対した問題では無いのでこの際捨て置く

が、目が覚めたら目の前に女の子が居て此方を見つめてましたなど、一体どれだけ漫画やライトノベルで使い古された展開だよと叫びたくなる。今でもまだ安定して使われる王道の展開だとは認めるが、『魔神少女カタストロフ・インパクト』という漫画のように導入部分でヒロインがいきなり地球を破壊するくらいのインパクトが欲しいと思う。いや、現実でそんなことがあっても困るが。

……ってダメだダメだ。現実逃避はダメだ俺。

冷静に落ち着いて状況を把握すべきだと、改めて少女の姿を眺める。

彼女の服はどう見てもこの学園の制服だ。高等学校という、十五歳以上の年齢である者達が通う学園に十歳程度の少女が居るというのは明らかにおかしい。故に慌てたし、驚愕もした。

が、

……十歳だからって、別にこの学園じゃおかしくないか。

落ち着いて考えてみると、何ら不思議では無い。

普通の高等学校ならば直ぐに職員室か校長室に連行されて保護者を呼ばれてもおかしくはないが、この学園においては話が別だ。

しかもよくよく見ると、教室前方、黒板には白と何処から持ち出したのか分からない虹色のチョークで『転入生』と無駄に大きく書かれて居た。

その文字と、今までの知識と経験から推測出来るのは二つ。

1：『特別生』の資格を持っていて、わざわざ飛び級で入学して来た。

2：見た目はあれな少女だが、実年齢が実は十五歳。

可能性が高いのは前者だ。
国から十五歳以下で戦闘系魔法を学ぶのを認められている『特別生』の資格持ちは、学力さえ高ければ日本国内において飛び級することも許可されている。
なのでこの学園に飛び級で入って来たとしても、それはなんらおかしいことではない。比較的稀、というだけだ。
しかし、だとすれば彼女は、

……相当な天才ってことだぞ……。

普通十五歳で入学し、しかも日本に七つしか無い魔法生徒育成国立高等学校に飛び級で入学するなど、並大抵の事ではない。
しかも、転入生というならば、去年の内に行われた入学試験ではなく転入試験の方を受けたということだ。三万人中約九千人しか合格しない入学試験の、更に数十倍の難易度と言われる転入試験に、五年程の差がある者が合格するなど尋常ではない。
そう、思っていたら、

「……アンタが高城堅二（たかしろけんじ）でいいのよね？」
「っ、そうだけど？」

……いきなりアンタ呼びかよオイ。

ずっと思考の渦にはまっていたためか、痺れを切らしたように沈黙していた少女から声をかけられる。
なので彼、高城堅二も不躾な第一声に眉を寄せつつそうだと返答した。
己のボサボサ鳥頭となっている黒髪を掻きつつ、自然と不機嫌になった目で彼女の顔を正面から直視する。
対する少女は、

「……」

何故か黙ったまま、此方へと向ける視線を強めた。

その小さな身体から放たれる剣のような鋭い視線に、何か怒らせるようなことしたかと堅二は首を傾げる。

周りからの好奇の視線が強まる中、やがて少女は口を開いた。

小さな唇から紡ぎ出されるのは、

「福岡県魔法生徒育成国立高等学校、空峰学園（そらみねがくえん）一年２２６クラスに在学する高城堅二（たかしろけんじ）」

「あ、あぁ。それがどうし――」

「男、十五歳」

「――？」

まるで此方の言葉を聞いてないように遮られ、あれ？　と堅二は思う。

茶髪の少女は今、此方を見つつ口を動かしている訳だが、何故かその姿を見て、壮絶に嫌な予感を感じた。

ぶわっと気持ち悪い汗が吹き出し、肌の上を通過していく。

ベタベタした冷や汗という名の汗が堅二の顎へと垂れている内に、少女は更に視線を強めて、

「今年の八月三十日に誕生日を迎え、十六歳となる。よって誕生日は十六年前の西暦一九九五年八月三十日、乙女座。身長百七十五センチ、体重七十キロ。血液型はＡ型、特にアレルギーや持病などは無し。好きな食べ物はスイカで、嫌いな食べ物はゴーヤ。趣味は特に無し。好きな事は頭を余り使わないスポーツ、嫌いな事は頭と手が疲れる単純な作業。得意科目は現代国語、苦手科目は英語を始め

とする外来語。得意魔法は強化系で、苦手魔法は儀式系。特に儀式系は殆ど適性が無し。戦闘スタイルは典型的な近接魔法剣士、接近戦タイプ。尚、ある程度のレベルに達している放出系魔法を使えるため、中距離戦にも接近戦の補助レベルで対応可能。戦闘ランクはB一、十五歳にしては高く、『特別生』であることを垣間見せる。それ以外の公式ランクは習得していない。性格は普通、だが最近の若者らしい不良要素あり。問題視する程では無い。家族関係は兄が一人に両親が健在だが余り良い間柄では無い。友人関係も親友二人に話すだけの知り合いレベルの友人が多数存在するなどと、それなりに良い。学園まで電車で約十分という場所にあるマンションの一つに一人で住んでいる。一人暮らしな所為か――」

……うぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ――!?

なんか、言葉の濁流を叩きつけられた。

少女の口からつらつらと上げて行かれるそれは、全て自分に関することだ。

心中で気持ち悪い悲鳴を上げる堅二は、完全に頬を引き攣らせて身体も思考も固まらせてしまう。どんな言葉が飛び出るのかと思えば、自分が履歴書に書くようなプロフィールを列挙されたのだ。引かない方がおかしい。

一方で、教室の沈黙を破った少女は、目を閉じることさえせずスラスラと続けて、

「――ある程度の調理や家事が行え、サバイバル能力も訓練により習得している。小学生での成績は国語5、算数4、理科3、社会3。中学生での成績は国語5、数学4、理科4、社会3、英語2。その他の科目に関しては体育が5で、他は全てオール4。小学生の時作文で面倒だったのか『《全略》』と書いたことがあり、担任教師を

本気で怒らせた経験がある。中学生の時に後に犯罪者とされた者五名を事故で病院送りにし、警察に拘束されたこともある。五歳の頃、瀕死の重傷を負い死にかけるも無事。それ以後、生死に関わるようなことはあっていない。ただ中学の修学旅行の際に間違えて酒を飲み、酔った勢いのまま全裸で清水の舞台からノーロープバンジージャンプをしてしまったことも。過去、恋愛経験は無し」

……なんでそんなことを知ってる……っ！？

当事者でももう記憶が薄れかけている過去の失敗談を、どうしてこの少女が知っているのか。

周囲からの好奇の視線が堅二に強く集まり、今度は別の意味で冷や汗が噴出し始めた。今、教室内に満ちる声は、原稿を読み上げるアナウンサーのような少女の声だけで、それ以外には音というものがない。

つまりそれは、少女の声が遮られることなく周囲に筒抜けということで、

……隣のクラスまで聞こえてねぇよな……？

己のプロフィールやら恥ずかしい過去やらを上げられる堅二としては、全力で祈る他無い。というかこれ人権侵害じゃないだろうか。訴えたら勝てないだろうか。

平然と読み上げて行く少女に対し、殺意にも似た気持ちが湧き上がるが、

「好きな女のタイプは、裸エプ――」

「おおおおおおおっ！？」

「ムゴッ！？」

『好きな女』の部分で腰を浮かせ、『裸エ』の部分に至った時には絶叫を上げながら少女の口を塞いでいた。
過去最高と言っていいスピードで突き出された堅二の右手は、茶髪の少女の口を完全に塞ぎ、形ある声を発っせなくする。息がし辛いのか、「ムームー！」と呻きながら手を剥がそうともがいているが、堅二には知ったことではない。
彼は周りに目をやって、大部分のクラスメイトがクエスチョンマークの？を頭上に浮かべてるのを見て、ホッと一息つき、

「あのなぁお前！　何処の誰だか知らねぇけど、一体なに言ってやがる！？　明日から俺のあだ名を『裸エプロン』にするつもりか！？」

盛大に自爆した。
右手を剥がそうともがく少女に怒鳴って、数秒してから、

「……あ」

再度静かになった教室の空気と、自分の発言の失敗に気がつき、堅二はもう一度辺りを見渡す。
何人かは今だに訳が分からないのか首を捻るなどのリアクションをしており、

「やぁ、裸エプロン君」
「よォ、自分も全裸の裸エプロン」
「今日も元気か？　裸エプロン」
「『クラスメイトが裸エプロン好きだった件』……よし、スレ立て完了」
「裸エプロンか……、いや、否定する気は無いんだが、やはり性的興奮を一番促すのは女性の裸自体だと――」

単語の意味が分かる者達の半分が、ニヤニヤ顔で此方を見たり挑発して来たりした。ムカつくことこの上ない。そして他半分程、主に女性陣が顔を赤らめて此方から逸らしたりしている。
先程までの沈黙が嘘かのようなざわめきと声が、教室を満たし始めていて、内容はもちろん堅二の爆弾発言についてだ。
そんな周囲の反応に堅二は慌てて、

「ま、待て！　ちょっと待てお前ら！　俺の話を……って何そこメモとってる！？　そっちの焦げ茶髪は何録音魔法機取り出してんだオイ！？　何に使うつもりだお前ら！」

叫ぶのだが、一向に効果が無い。一応当事者なのに、誰も此方を見ていなかった。

……水を得た魚っていうのはこういう事を言うのか畜生！

誰か話を聞いてくれないかと堅二の視線がさまよい、行き着く先は教壇。
其処には一人の女性、２２６クラスの担任である先生が居て、

「せ、先生、エッチなのはダメだと思います！　そ、そういうのはもっと大人になってから……はうっ」
「先生ぇぇぇぇぇぇぇっ！？」

顔を真っ赤に染め上げてよろめくように膝をつく担任教師（二十五歳）の姿に、堅二は叫ぶ。使えねぇと。
今ほど先生がもっとしっかりした人であって欲しいと思った事はなかった。
そうこうしている内に、辺りのざわめきはドンドン大きくなって

いって――、

「待てよ、テメェ等」

野太い声が一つ、ざわめきを切り裂いて木霊した。
ふとざわめきが消え、皆の興味と目は声の主へと向かう。
声を放ったのは、堅二ではない。
教室左斜め前方の席に座る、身長百九十センチはありそうな、大柄な少年。青白い髪と、赤い瞳が特徴的だった。
彼は椅子から鈍い音を上げて立ち上がり、

「ちょっと堅二のことで勘違いしてるみたいだから言っとくが、コイツは裸エプロンなんざ好きじゃねぇぜ」
「か、神原(かみはら)……！」

神原と呼んだ少年の言葉に、堅二は思わず腕や足に力を入れる。今朝の模擬戦ではっちゃけやがったアホの友人だったが、まさかこんな所でフォローしてくれるとは思わなかった。やはり持つべきは友達だ。
何やら右手の先からくぐもった悲鳴が上がったが堅二は無視しつつ、願うように皆の注目を集める神原を見る。

……頼むぞ神原！

そんな堅二の内心を知るように、神原はうんうんと頷く。分かっている、分かっているぞと言わんばかりに。
そして彼の口が大きく開けられ、

「堅二はなぁ、――裸白衣好きだ」

今ほど殺意だけで人が殺せたらと願った事はなかった。
心臓の弱い人ならそれだけでショック死してしまいそうな、殺意を大量に込めた魔力を発するのだが、神原は俺の役目は終わったとばかりに清々しい笑顔で席に座り直すだけだ。
教室のざわめきは一層強くなり、

「裸白衣、だと……！？　なるほど、そういうのもあるのね……！」
「さっきから裸エプロンだの裸白衣だのなんだ？　なんか美味いもんのことか？」
「はっはっはっ！　自分は断然、水着派だけどね！」
「あぁ……、あの人は常識人だと思ってたのに……」
「金だ！　これは金になる！　ククク、ビジネスの準備だ……！」
「堅二って、何時の間にそんな性癖に……、私一応幼馴染なのに、全然知らなかった……」
「裸白衣かぁ……、ゴーグル属性とかも世の中にあったりするのかなぁ？　そこら辺どう！？」
「変態が急増されて、いや、オープンじゃないから変態じゃないのかな？　なんだか定義がよく分からなく……」

……なんか色々ツッコミてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！

一人一人の言葉に色々叫びたくはあるものの、そうするだけの時間も余裕も無いし、テンションが現在進行形上限無しで上がりまくっているクラスメイト達には言っても通じるかどうか。
段々と収拾が付き添うに無いほど騒ぎ出した教室内の魔境を見やり、怒りを通り越してもはや呆れの領域に達しかけている堅二は、どうしようかと考えて、

「ぷはぁっ！」
「んっ？」

騒ぎの原因たる少女の口を塞いでいた右手の拘束が、力づくで解かれた。
彼女自身が小顔なのと堅二自身の手の平が大きかった所為か、口どころか鼻まで塞いでいたらしい。よって少女は窒息寸前だったらしく、拘束を解かれた今何度も繰り返し深呼吸をしていた。
肩を上げ下げし、ゼーハゼーハと熱の篭った息を吐き出す姿は、まるで全力疾走した後のようで、

「ようガキ。早速だがこの状況をどうするつもりだ？　どう責任とるんだ、あぁ？」
「……っ！　……っ！」

怒気を秘めた堅二の問いに、少女は直ぐに答えない。
いや、何か言おうとはしているようだが、

……呼吸を整えきれてないか。

待て、とばかりに手の平を向けて突き出された彼女の手を見て、堅二は素直に待ってやることにした。どうせ急いだ所でクラスメイト達のテンションが下がる訳でもない。上がるかもしれないがそれはもう知らない。
机を挟んで反対側に立つ少女を、彼女よりも高い位置にある目で、見下ろした。

「……すー、はー……、すー、はー……」

茶髪の少女は俯き、片手を膝につけ前屈みとなり、足りない酸素を取り入れるため深く呼吸している。
やがて。

暫く、数秒程すると少女の呼吸音も普通になって行って、肩の動きも収まって行き。
呼吸音が耳で聞き取れない程小さく、静かになった直後、
「――殺す気なのこのバカ！！」
「言わせてもらうがお前は俺を社会的に殺す気か！？」

全力で言い返すと、上体を跳ね上がらせた少女に涙目で睨まれた。
よっぽど苦しかったらしく、茶色の髪は髪形など知らないとばかりにぐちゃぐちゃになっていて、顔全体がリンゴのように赤い。興奮していて、まるで泣くのを堪える子供のようだ。
重度の犯罪者ロリコンなら速攻で「ハァハァ……、ねぇ、ちょっとおじちゃんと面白い遊びしない……？」などと言って連れ去ろうとしたり、そうで無い人であっても保護欲を刺激される姿だが、生憎と社会的死を迎えかけた、もしくは迎えようとしている堅二はそんな感想を抱かない。
緑の瞳を涙ぐませ睨む少女へと指を突きつけ、

「プロフィールはまだいい、過去の失敗談とかもな。だけど性癖はダメだろう性癖は！　男が一番知られたくない物を、よりにもよって『好きな女のタイプ』とか言うか普通！？　それじゃまるで俺は裸エプロンしている女の子にしか興味ねぇみたいじゃねぇか！」
「えっ……？　違うの？　私は『あの男は裸エプロンじゃない女は女として見ていないらしい……』って聞いたんだけど」
「そんなデマ言ってた奴誰だぁ！？」

きょとん、と睨むのも忘れて訪ねてくる少女の姿に、天井を見上げ叫びを逆らせる堅二。
一体何処のどいつが自分の性癖を曲解して茶髪の少女に教えたのか。

……というか俺の性癖が何時ばれた……！？

自分は確かにそういう趣味があるが、それは最重要トップシークレットとして中学時代から延々と隠し続けて来た筈。

なのに、何故だ。何故ばれている。何故……、

「……そういえば、一つ聞きたいんだけどさ」

「！」

その声に、堅二は現実へと帰還した。

とりあえずは現実に対処しなければと、少女の言葉へ促しの返答をする。

「何をだ？」

「何でこんなにこのクラスの連中騒いでるの？　何かあった？」

「原因の半分はお前による俺のプロフィール及び性癖の暴露だよ……っ！」

……残り半分はウチのクラスメイト達が異常だからだけどな！

少女の言う通り、今や教室は隣のクラスから抗議が来てもおかしくない程ギャーギャーワーワーと騒いでいる。

今までは会話や動きから生じる雑音だけだったのに何時の間にやら悲鳴や打撃音なども響く、真の魔境と化している。

「あァ！？　何だよオマエ何様だ！？」

「貴方の方こそそのサングラスはなんですか。今日くらいは外しておけと何度も言いましたよね？」

「アダダダダダダッ！？　待て待ってくれギブギブギャァァアア

アアアアッ！？」
「人のスカート見てエロい妄想する奴の言葉なんか聞くかあああああっ！」
「ふふっ、君達は本当に仲がいいな」
「……」
「えっ？　なんですか袖引っ張って……、あっ、これ開ければいいんですね？　……私すっかり雑用係だ……」
「裸白衣！　なるほど、これは真境地だね！」
「言っとくけど、女が着るからいいんであって、男が着ても意味ないからな其処の馬鹿ー」

もう誰が何を言ってるのか一人一人の音が大き過ぎて把握出来ないが、とにかくお祭り騒ぎのように各々が好き勝手に行動している。
朝のＨＲ前の静かな時間は何処へやら。
蹴り飛ばされたであろう椅子が宙を舞うのを見つつ、

「なんか、もう帰りたくなってくるな……」

本心からそう呟いたが、周りに伝わることはない。
その事に堅二がため息をついていると、少女の方から、

「ていうか、裸白衣ってなによ？　そもそも裸エプロンってのもよく分からないけど」

純真そのものの問いかけが直撃した。
堅二は見えない衝撃にぐらっとよろめきかけるものの、何とか踏ん張って堪える。

……知らずに言ってやがったのか……！？　さっきのプロフィール列挙といい、変な所で無知なタイプか！

質問者である少女は、そんな堅二の態度を不思議そうに見ていて、
「？　どうしたの？」
「いや、別に何でもねぇ……、それより」
堅二は強引に話を変えた。
身体を起こして真っ直ぐ立ち、
「お前、誰だ？　あの黒板からして転入生っていうのは分かるが……、なんで俺のことをそんなに知ってる」
「知ってる、じゃなくて調べたんだけどね。まぁ色々あるのよ」
「調、べた……？」
……調べられるような立場の人間か？　俺。
訝しむものの、少女は此方の質問に答えきったと感じているのか、暴走するクラスメイト達に緑の瞳を向けている。
この少女は此方のことを調べたと言い直してまで言った。それは、彼女が偶然聞いたなどではなく、自分の意思で情報を集めたということだ。一学生に過ぎない高城堅二のことを。
どれだけ調べたのかは、あのプロフィール列挙を思い出せば理解出来る。
だが、そうされるだけの理由が堅二には思い浮かばない。
いや、
……一つだけあるが。
一つだけ、堅二には心当たりがある。自分という個人のことをわざわざ調べられる『理由』。思いつくそれは、生まれた時から決ま

っていたもの。
二、三年前からは更に注目されるようになった『理由』が、彼女が自分を調べた原因だというのなら、納得出来る。
その『理由』はそれだけ大きくて、重い。
そして、堅二は自分のものではないその『理由』が、大っ嫌いだった。
だから、尋ねる。

「なぁ、お前――」
「……はっ！？　み、皆さんどうしてこんな体育祭みたいに盛り上がってるんですか！？　先生もしかして時の流れに置いていかれてます！？」

疑問を尋ねることは出来なかった。
少女に声をかけようとした瞬間に響くのは、何処か間の抜けた担任教師の声。
教壇の上で何故かオロオロしている彼女は、

「えーと、えーと、えーと……、あっ！　思い出しました！　裸エプ――」
「先生もっと前だ前！」
「えっ、あれ？」

うーん、と虚空を見上げて悩む先生の姿に、額を手で抑える堅二。
先生のおっとり姿に影響を受けたのか、騒いでいたクラスメイト達も沈静化して、今はもう自分達の席へと座って前へと向いている。
クラスメイト達の変わり身の速さに呆れる間もなく、思い悩む先生が「あぁ！」と言って手を叩き、

「そうそう、転入生さんが居るんでした！　いやぁ先生すっかり忘

れちゃってました。堅二君、あまり先生を困らせないでくださいね！　先生も怒っちゃいますよっ」
「いや、原因は俺じゃ……、あっ、もういいです、はい」

プンプンと擬音が付きそうな先生の姿に、堅二は弁明することを止めた。
これからの学校生活に対する得体の知れない不安が巻き起こるが、気づかなかったことにして着席する。
左斜め前方から笑いの気配を持った視線が飛んで来たが、それも気づかなかったことにした。
見れば教室内はまだ微かなざわめきがあるものの、全員が席へと座る朝のＨＲ前の風景へと戻っている。
ただ、普段と違うのは、堅二の机の前に、茶髪の少女が立っていること。
それだけだ。

……コイツ、前に戻らなくていいのか？　というか、俺が起きるまでどこまで自己紹介とかしたんだ？

彼女はどうするのかと、堅二は問うべきか迷い、

「……後で話があるから」

そう言って少女も踵を返し、堅二に背中を見せて前の方へと歩いて行く。
歩く度に彼女の体重が軽いことが分かる軽い足音が、何度も床と彼女の上履きから鳴った。
さほど広くは無い教室内の机と机の間。狭い通路を彼女は歩き、やがて反転。

……！

堅二は見る。

彼女の回転する動きが、とても洗練されていて、尚且つ無駄が無いものだと。

軸たる足はバランスを一瞬とて崩さず、両手は大して動かしてないというのに回転の遠心力は強く、そして回転して踏み止まる姿にブレは無い。

恐らく武器は銃だろうと、堅二は当たりをつける。あの状態で両手に銃器を持ち高速回転すれば、全方位への高速射撃になる。それも次の挙動への隙が殆ど無いものに。

それは魔法が直接的に関わる訳では無いが、戦闘系魔法を学ぶ者としては大事な動きだ。

自分以外にもその姿を見て思った者が居たのか、ほうと息をつく音や警戒の気配を放つ者が居る。

「ではでは、気を取り直して自己紹介お願いしますね～」

……まだ自己紹介してなかったのか。

虹色のチョークを先生から手渡され、不理解の表情をする少女を見て肘を机につく。

どうやら今から黒板に名前を書くらしく、黒板の上半分を完璧に支配している『転入生』の下に、チョークを持った彼女は手をやった。

……さて、どんな名前なんだ。

少女がどんな姓と名を書くのか、堅二はそれなりに注視して黒板を眺める。

彼女の小さな手に握られているためか、握られたチョークがやけに大きく見えた。
その虹色チョークが、少女の白い手に従って動き始め、文字を書き始める。
硬い物が擦れて片方が粉になって行く音が、短く何度も連続して鳴り響き、文字を作り出していく。
まず書かれたのは、カタカナの『タ』が二つ。次に移って書かれたのは縦長の『方』で、小さなカタカナの『ノ』、漢字の『一』、更に横棒と縦線を幾つか書いて漢字の『目』に似た所々突き出た字を作ってからの、カタカナの『ハ』。
これで姓は書き終えたのか、彼女の手は空間を少し開けた。
次に書かれるのは漢字の『十』、次に『目』、漢字の『一』、そしてカタカナの『ハ』。恐らく最後であろう字の最初はカタカナの『ノ』に漢字の『二』。そして終わりに漢字の『人』。
己の名たる完成した文字達を一度だけ少女は確認して、教室側へ向き直る。
小さな唇から零れるは、文字を音とする声。
「多旗真矢（たはたまや）。十歳、『特別生』の資格を利用した飛び級生」
そこで少女、真矢は言葉を切って、
「――よろしくね？」
何処までも自信に溢れた強気の笑顔で、そう言った。
堅二が今まで見た笑顔の中でも、それは堂々の一位に輝く程の可愛さと、美しさを兼ね備えていて。
これから、高城堅二という少年が多旗真矢という少女に関わる内

に、何度も見ることになる笑顔だった。

思いは現実にはならない。
思いは行動になるだろう。

第無章・昔の深夜

何かを思うのは簡単なのに
何かを言うのは難しいのは
自分が馬鹿か餓鬼だからか

「そこの女の子！　お前だよ、茶髪の女の子ー！」
「……」

この時。
最初は人違いか、恐らくは別の誰かを呼んでいるのだと思った。
でもいつも通り歩きつつ、後者は無いと断定出来た。何故なら今の時間は深夜の十二時。つまりは、日付が変わる瞬間の時間帯。周りは魔力街灯の光のみがぼやっと照らす住宅街で、人も魔力車も一つたりとも居ない。完全な無人、という訳では無いのだろうが、少なくとも自分の周りはほぼ無人だった。だから自分の近くに他の誰かが居て、そちらへと声をかけているという訳では無いだろう。
となると、前者なのかと思うが、人違いをしているのなら探し人の名前で呼ぶはずだ。わざわざ『茶髪の女の子』などという此方の特徴で呼ばないはず。

……っていうか、よくまぁこの薄暗さの中で髪の色なんか判別出来るわね。

視界が暗闇によって完全に潰されている訳では無いが、それでも色を判別するのが難しい程の暗闇であることは確かだ。
視界を補強するなんらかの魔法でも使っているのか、などと考えているうちに、呼びかけて来た者の足音が後ろから近づいて来る。
距離は、近い。

……逃げると面倒、か。

大声を上げられたりしても面倒だ。なので、ゆったりと速度を落として後ろを振り返った。街灯の下に移動したため、ここからは向こうの姿が夜にしてはよく見える。

此方へと歩いて来るのは、この近くにある中学校のブレザー型の制服に身を包んだ十二、三歳程度だと推測出来る少年。

靴は学校指定であろう黒の革靴。自分よりも背の高い体躯に、暗闇の中に紛れそうな黒髪と黒目。手入れなどされてなさそうな髪の毛と、面倒そうに吊り上げた目からは馬鹿不良の雰囲気が全開で放たれている。

乱雑そうでいて、しかし何処か恐怖を拭い去る姿。平凡そうでありながら、深夜の夜空を背景に佇む少しズレた異常さ。

あぁ、

……考えると、まだパターンあったわね。

自分としたことが、失念していた。

一応生物学上女である自分に、夜道で前触れなく声をかけてくるような男が居るとしたら、理由はほぼ確定されるではないか。

つまり、

「あのさぁ……、一応言っておくけど、アタシ七歳よ？　流石にちょっと性癖が五百四十度カーブして無いかしら……？」

「いきなり最初の言動がそれかよ……っ！？　しかも例えがよくわかんねぇ！」

なんだこの色々ぶっ飛んだガキ……、とでも言いたげな目で見下ろされ、むっとなる。

此方だって夜道で突然喋りかけて来やがってこの不良男、と思っ

ているが表に出さないようにしているというのに。
だがここで怒鳴りかかっても仕方がない。ここは落ち着いて、さっさと用件を話させるべきだ。

「で、夜道で突然喋りかけて来た怪しさ全開の不良男さんの用は何？」
「お前は俺になんか恨みでもあんのか……」

怒りはあるが、恨みは特に無いと思う。しいて言うなら、帰路を邪魔されたことだろうか。
街灯の下。肩を落としてため息を吐く少年は、頭髪をガシガシと右手で掻いて、

「こんな時間に外歩いてる八歳児なんか見つけたら、普通は声かけるだろ。常識的に考えろ常識的に」
「なるほど。自分で幼児狙いのロリコン不審者宣言するなんて、流石本物は違うわね」
「……なぁ、お前本当に七歳か？　幻術とか身体変化とかの魔法使って誤魔化してねぇよな？」
「まぁ、大人びてるとかは普段から言われなれてるけどね。ちゃんとした七歳児よ、一応」

こんな七歳児が居るとか世も末だな……、と呟く少年。
「こんな」という表現に多少イラッ、と来たが、あまり突っ込んでいては話が進まないので、取り敢えずスルーして口を開く。
早く済ませて、家へと帰りたい。

……もっとも、帰りを待ってくれてる人が居るわけでも無いけど。

「で？　実際、何の用なのよ？」

「……別に何か用がある訳じゃないけど、こんな時間帯に外歩いている子供が居たら、よっぽどの馬鹿か悪人でも無い限り心配で声かけるだろ？」
「……」

……なるほど。
そういうことか、と言葉を聞いた脳内で答えが一気に組み上がる。
ようするにこの少年はお人好しと呼ばれる類いの人間で、一人夜道を無防備に歩く赤の他人である年下の存在を見逃せなかったと、そういうことなのだろう。自分の予想はまるっきり逆だった訳だ。
だからこそ、

「――はぁ」

自分は呆れた。
呆れて、少年に背を向けて、

「別に、心配されなくても家にくらい一人で帰れるわよ」
「確かに、ここまでの会話で正直心配とか不安とかそういうのが軒並み減って行ってるが……、でも最近ここら辺で犯罪者ランクCぐらいの通り魔が出てるって話だし、やっぱ心配だから家まで送ってく」
「……それ、勝手な善意の押し付けか、もしくは都合のいいストーカーのセリフだってこと、分かって言ってる？　分かって言って無かったら、アンタ天然系ストーカーよ」
「どうしてこの幼女はこうねじ曲がった返答をしてくるかなぁ……！？　そんなに俺を性犯罪者にしたいか？」

怒り爆発一歩手前の少年を見て、だったら早くアタシを見ないふりして何処となりと行けばいいのにと心中で呟く。

暴言を吐く、怖い物知らずの自分などほうって置けばいいのに。
一つガツンと言ってやろうと唇を湿らせて声を放とうとした直前に、呆れと疲れとをミックスさせた声が背後から一つ。

「たっく……、あのなぁ、とにかくお前ん家まで俺が送るか、もしくは交番に直行するか。ほら、二つに一つ。早く選べ」
「……はぁ？　なーんでアタシが、んな選択を迫られなきゃならないのよ？　第一ねぇ――」
「じゃあ送ることに決定な。とっとと帰るぞ」
「きゃっ！？」

向こうは自分の話を欠片たりとも聞いてなかった。
瞬時に、まるで荷物を抱えるように小脇に胴体を挟まれ、そのまま此方の重さなど感じられないかのように軽い足取りで歩いて行く。
視界が不規則に揺れ、地面のアスファルトに埋め尽くされているのを認識し、

……――やられた！　って、コイツ、結構やる……！

見事なまでに油断していた自分への叱責の念と、鮮やかかつ無駄の無い少年の手管に驚愕の念が生まれる。
慌てて腰に回された手を外そうとするのだが、少年が歩く度に身体が揺れるため、上手く四肢を動かすことが出来ない。
そうこうしているうちに、少年は自分を抱えたまま、深夜の街中を颯爽とかつ素早く歩いて行く。此方の同意も何も受けずに。
視界の自動通路のように流れて行く真っ黒な地面から、それを感じ取って、

「ちょ、離しなさいよ！」
「うるせぇ！　ぶっちゃけ俺も十三歳で未成年だから、こんな時間

に交番行ったら注意とか持ち物検査とか学校連絡とかされて面倒なんだよ！　中学の説教担当体育会系教師がどれだけ怖いのか知ってんのか！？　主に筋肉ムキムキマッチョ汗ダラダラ系的な意味で！」
「いや、そんな自分勝手な中学事情話されても知らないわよ！　いいから離しなさい！　別にほっといても……」
「だからうるせぇ！　お前は俺を今日寝れなくするつもりか？　俺に安眠妨害したくなけりゃ、今すぐお前の家が何処なのか教えろ！　後三十秒以内に答えなきゃこのまま俺の家に行くからな！　其処で朝まで監禁拘束決定だ！」

……コイツ、無茶苦茶――っ！

先程お人好しなどと言ったが、あれは訂正する。
この少年はお人好しなどでは無かった。善意の押し付けどころか、沸点低い現代風若者、簡単に逆ギレぶちかます自分勝手な独裁者。ツンデレ不良と言うのもはばかられるレベルだ。というかうるさいというのはなんだ。お前の方がうるさいわ。
いや、ここまで横暴かつハイテンションな態度をとって来るのは、自分の罵倒が原因でもあるのだろうが。だがそれでもここまでされてしまえば、もはや呆れる以外の感情が出て来ない。

「……あのね？　一つ言いたいんだけど、いきなり喋りかけて来て、返って来た返答にキレて、更には人攫いみたく小脇に自分の身体を抱えている人間なんかに、自分の家の場所なんか教えると思う？」
「じゃ、どうしろってんだよ？　言っとくが交番に行くなんて選択肢はもう無しだぞ。俺が困る」

……――本当に勝手かつ最低ねコイツゥ！？

己も褒められたような人間では無いことは分かってるが、それで

もそう感じざるを得なかった。
　もう本気で抵抗してやろうかとも思うが、やり過ぎてこの少年の言う通り警察などが出て来ても面倒だ。流石に、年齢的に警察の世話になるのは早過ぎる。
　だから、

「……はぁー」

　仕方ない、と盛大にため息を吐き出した。
　あからさまな此方の態度に、少年の眉が不機嫌そうに釣り上がるが、

「……そっちの道を右」
「おう」
「……」

　ぼそっと小さく呟くと、明らかに歩くスピードが跳ね上がる。聞き取るのが難しいくらいのとても小さな声だったのだが、聞き取るとはやはりこの少年はただ者では無い。
　前へと身体が進む動きも、前へ前へ進む足の速さにくらべて、やけに全体の速度が早かった。背後からは普通は足音としてある訳のない『ピシッ』という亀裂の音が聞こえる。
　これは明らかに、魔法を実戦レベルで扱える者の動きと力だ。しかしそれだとおかしいことになる。確かに魔法は、練習と才能次第でこの世の誰もが使える技術だが、

　……普通、日本は一九四六年に第二次世界大戦敗戦後、作られた平和条約として『日本は必要最低限以外の魔法武力を持たない』っていうのがあるから、アタシみたいな特別なケースでも無い限り、魔法生徒育成国立高等学校か、警察及び自衛隊などの職業以外にお

いて戦闘系魔法の習得は殆どが禁止されてる筈なんだけど……。

世界法則の一つである魔法は、才能も関係するが基本的に個人が扱える最大の武器だ。

古来、まだ神々がこの星に普通に存在していた頃の時代より受け継がれし、魔力という精神感応素粒子を利用した魔法という技術は、使う者によっては国の一つや二つ傾かせるほどの力を秘めている。中では島を消し飛ばしたり、一対万の戦闘において勝利したなどという者も歴史のページには刻まれている程だ。

そんな、使い方によっては人をアリのように殺せる魔法。この技術をむやみやたらと今の平和に慣れ切った人々に教えてしまえば、間違いなく過去の再現とばかりに神話のような戦争が起きる。無論、国内、国外に関わらずだ。

しかも昔の、世界大戦などがあった時代の場合、そういった幾つもの大きな争いがあったために、開発された魔法兵器だけでなく、個人個人の一騎当千の力量も必要だった。が、平和を目指す現代社会において、大方の人々の生活に必要なのは人によって力量や効率が変わる魔法ではなく、魔石や魔力水という魔力結晶体によるエネルギーで動き、誰が使っても安定した性能を持つ、魔法術式技術によって作られる『魔法機』方面の力。

個人で、しかも殆どが戦闘にばかり特化している魔法は、世界の大方が平和を目指す今では昔程の重要性と必要性を持たない。

なのでそういった魔法や魔法兵器に関する規則が緩い外国はともかく、平和条約がある日本においては戦闘系魔法を学ぶことについてかなり厳しい制限がついている。

その一つに十五歳以上という年齢制限があるが、

……といっても、才能と人格次第でそんな規則なんか幾らでもスルー出来るけど。

小さな声で少年に指示を飛ばしつつ、思う。
日本には、幼い頃に大量の魔力を持って生まれ、扱う術を知らないがために『爆死』したという記録も残っている。
人によっては、魔法という危険な力を学びたくなくても学ばなければそれはそれで危険だという、まるで運命に縛られているかのような者も居るということだ。
つまりは自分もその一人で、しかしどちらかというと自分は自分の為に学びたくて学んでいる。
彼はどうだろうか、と視線を上げて此方の指示通り歩いて行く少年の顔を見た。
黒髪黒目、平凡な顔立ちの彼は、どうなのだろうか。

「……アンタさぁ」
「なんだよ、世間話か？」

此方の問いかけに、打てば響くとでも言いたくなるくらい早く返答が帰って来る。
深夜の世界、少年の足音とお互いの息遣いの音しか存在しない中、彼の声は耳に強く響いた。
声の調子からして、機嫌は上々のようだ。素直に従うと機嫌が戻るとは、何処までも馬鹿正直な少年だと思う。

……バカね、本当。

夜道を歩く此方を心配して声をかけて来たというのに、早く家に帰りたく面倒なことをしたくないという自分の心を隠しもしない。
此方の言葉にだって、子供だからとヘラヘラした笑顔の仮面を見せることなく、ただ率直に感じた言葉と行動で返して来る。
お人好しでありながら、しかし自分勝手。だがその自分勝手さが、彼のこの行為が善意からのものだと自分に教えてくれる。

本当に自分勝手、自分が最優先ならば、生意気な此方のことなどさっさと見捨てる筈だ。こんな面倒で接するだけで不快な幼児の自分を家まで送ったりする必要はない。
今までの人生で初めて見るタイプの人間だった。
七年という短い人生の中で、自分を前にこんな態度をとる人間を他に自分は知らない。
此方を子供だと思い、笑顔の仮面を被っている訳でもない。子供にしてはおかしい思考と言動に、気味悪げな態度を見せる訳でもない。完全に大人として、一人の魔法使いとして接する訳でもない。
上から年下だと見下しながら、しかし自分を隠さず、正直であり続けている。

「アンタ、どうして戦闘系魔法が使えるの？　それ、この近くの中学の制服でしょ？　どう見ても十五歳以上には見えないけど」

だから、だから尋ねた。
この少年のことを、自分に闇の中話しかけて来た不思議な彼のことを、好奇心と別の何かの所為で知りたかった。
彼は、此方の問いに一瞬驚いたように固まり、

「……そんなこと分かるとか、本当にお前七歳かよ。全く、将来が別の意味でちょっと心配になって来たな」

見せるのは、苦笑。
先までの馬鹿正直で面倒そうな顔ではなく、痛い所を突かれたという、誤魔化しの顔。
彼のその顔を見て、自分でも驚くくらい自然に口が動く。

「何よ、そんな顔も出来るんじゃない」
「お前から見て俺がどういう顔をしていたのか猛烈に気になり始め

たが、まぁ、な。というかお前から見たらただのロリコンにしか見えないと思ってたから見抜かれるとは思わなかったぞ、ガチで」
「見抜かれたくないのなら、日常的に魔法を使うのは止めときなさい。動きとか言葉とか纏う魔力とかで直ぐバレるわよ」
「そういうことが言えるってことは、やっぱりお前も『特別生』の資格持ちか……、七歳にしては言動おかしいし、こんな時間に堂々と外歩いてるから多分そうだろうとは思ってたけどよ」

彼は前へと顔を向け、歩く速さを落とさず、

「しっかし七歳でか……。俺は十歳の時だぞ？　国から『特別生』の資格貰ったのは。七歳なんていったら俺が知る限りでも最速。まさかうちの家族以上の天才が居るとは……」
「別に。アタシだけの力じゃないわ。家が昔から魔法使い兼研究家の家系なだけ。まっ、アタシが天才なのは違い無いらしいけどね」
「……天才、天才か。全く、俺みたいな凡人には遠い言葉だな」

何気ない一言に含まれた何かに、前へと向けていた目線を上へ上げる。
そこにあるのは、前へと歩き続ける少年の横顔だ。平凡で、黒髪が歩く度に空気に揺らされてる普通の横顔。
だというのに、表情は朧げな街灯の光に照らされているのに、よくわからない。七年という年月でしか生きていない自分は、彼の表情がどういうものなのか理解出来ない。
若くして『特別生』になった者ならば、自分を含めて大量に見て来た。高い才能を持ち、何らかの理由から魔法という力を学んでいる。
だが、彼の表情に浮かぶ表情の理由が、自分には理解出来ない。見たことが無いから、分からない。
顔に浮かぶのは、怒りだろうか、不満だろうか、欲だろうか、喜

びだろうか、不幸だろうか、幸福だろうか。
ただ、どうも理解不能な表情の理由は彼にとっていいもので無いことくらい、馬鹿正直な癖に苦笑で誤魔化そうとする似合わない姿から分かる。

「――ごめん」
「……いきなり何謝ってんだよ、ぶっちゃけ怖いぞ。気持ち悪い」

顔は此方へと向けられ、浮かぶのは潰れた毛虫でも見るかのような気持ち悪そうな表情。
うるさい自分だって謝るなんて行為が似合っていないことくらい分かっている。殆ど無意識で出たんだから、仕方がないじゃ無いか。
心の中だけで言い訳しつつ、此方をさりげなく心配そうに見てくる彼から、何故か熱を持つ顔を強引に逸らし、

「右！」
「へいへい」

やれやれ仕方ないとばかりに此方の怒鳴り声に応じる少年の態度に、頬が更に熱くなる。
どうしたことだ、と自分でも思っていた。自慢ではないが、他人に謝罪するなど生まれてから三度程度しかしたことが無い。
なのに、この少年は表面上怒っている訳でも不機嫌になっている訳でもないのに、自分は相手の顔色を伺う弱気な人間のように、無意識で謝っていた。

……ダメだ……。

どうもこの少年の前だと、調子が狂う。
そして、その調子が狂うという人生始めての現象を悪くないと思

う自分が居る。今まで考えたことも、想像もしなかった感情が胸の中に生まれていた。
ダメだ、と無意識で感じる。
この感情は、ダメだ。この感情は、一人で生きていくことには重みとなるものだ。この感情は、目的を果たすことには邪魔となるものだ。
故に、ダメだ。

……――――――。

だけど、と無意識で感じる。
この感情は、必要だ。この感情は、誰かと生きて行くためには必要となるものだ。この感情は、願いを果たすためには必須となるものだ。
故に、だけど、だからこそ、

……なんて、言ったら

何か言わなければ、と思い、しかし答えが浮かばない。
七歳とはいえ、そこらへんの大人の数倍は知識と人生経験があると思っていた。生まれも育ちも特殊な自分は、大人と呼ばれるただの肉体が大きなだけの者たちよりも上、天才と呼ばれる存在感なのだと。
しかし、それは間違いだったのだろう。
何せ、今自分は、この感情を言葉という形にすることすら出来ないのだから。

「――――――」

だから、言葉が出ない。

口を開いて、閉じて、その繰り返し。
水の中で必死に息継ぎをするような、間抜けな行動。
そんなことしか、出来なかった。

「おーい、何難しい顔してんだお前？」
「！」

声に心臓が跳ね上がった。
慌てた目で見れば、上から怪訝そうに少年が此方の顔を見てきている。
マイペースに進んでいた彼の足は止まり、二人の息遣いの音以外には無音の世界が生まれていた。其処まで考えて、自分が長い間思考にふけっていた事に気がつく。
一人ならば黙って考え込むのもいいのだろうが、人が居たら話は別だ。特にその人物が、他人のことを心配するような者であれば。
突発的（少なくとも自分にとっては）な返答を求められ、慌てた唇から勝手に言葉が飛び出る。

「べ、別に何でも無いわよ！　ただ、何時までこんな人を荷物扱いする気なのとかなんか制服から変な匂いがするとか髪の毛ボサボサじゃないのもっと気を使えとか本当に平凡な顔ねぇとか歩いてる最中に強化魔法ミスってこけそうねぇとかコイツマジ目がバカっぽいとかそんなことを考えてただけで……！」
「罵倒のオンパレードだなオイ！？　お前今俺の外見と内面の殆どを貶して潰したぞ！？」

別の本心が飛び出してしまった。
僅かに仰け反る少年の態度に、また新たな感想が浮かび、

「リアクションが一々大袈裟で芸人みたい」

「この腹黒幼女は本当に容赦ないな……！」
「お笑い芸人の『ユニバースフェアリー』だったけ？　あれにそっくりじゃない」
「あんな四十代後半なのにピチピチのビキニ着て『ユニバァァァァァァァァスッ！！』とか夕方バラエティ番組のステージど真ん中で叫ぶオバサンと一緒にすんな！　俺はあそこまで頭パーンになってるわけじゃねぇよ！」
「……じゃあ少しは頭おかしい自覚があるのね」
「……」

返って来たのは冷や汗を垂らし頬が引き攣る少年の顔と、自分を支える力の消失だ。
自分の身体は腰を横から抱えられていた状態、四肢は重力に引かれて宙ぶらりんだったため、まず身体が落下すれば一番長い足が地面へと着くことになる。
力が抜けた今の状態では、手で身体を支えきれず地面に上半身と顔面が叩きつけられる。

「――よ、っと」

だが、自分とて国から戦闘魔法を学ぶことを認められた『特別生』の一人だ。
このくらい、どうということはない。
まずは足裏のつま先だけを伸ばし、地面に着ける。其処から踵を着け、膝を曲げ、背中を後ろへと動かし、勢いのまま腰を下げ、重心を中心に持って来て体勢を整える。こうする事で手を態々着かなくても綺麗に着地し、尚且つ両手がフリーとなり、直ぐに立つ事が出来る。筋力さえあれば、後ろに跳ぶ事も可能だ。視界も前へと上がっているため、前方不注意になることもない。
魔法ではなく、戦闘において小さく簡単で地味な、しかし重要な

動きの一つだった。
両足を今度は伸ばし、地面に対して垂直に立つ。
流れる動きで人を荷物扱いしたかと思えば、いきなり放置するように手を離した少年の顔を睨んで、
「もうちょっと丁寧に下ろせないの？」
「離して欲しいって言ったのはお前だろ？」
生意気な、とは言わないことにした。言っても無駄だし、無理矢理誤魔化そうとしている雰囲気からして、スルーされるだけだろう。
ふんっと鼻息を鳴らし、少年より前に出る。
コツコツ、と自分の足音が鳴り、カツカツ、と後ろからの足音が耳に届く。どうやら少年は一歩後ろからついて来ているようだ。
何か言ってやろうかと心中に考えが浮かぶが、面倒なことになりそうだと口を引き結ぶ。
そのまま無視するように、無言で前だけを見て進み続けた。
二人分の足音だけが、深夜の風に紛れて消えて行く。
無言のまま、三十歩程歩いただろうか。
背後から声が飛んでくる。
「そうそう、一応言っとくが」
「何よ？」
つまらなさそうに返して、返答を歩きながら待つ。
今更何を言おうとしているのか気になったが、態々止まって振り返るほどのことではないだろうと足を前に、
「あんまり、簡単に他人を信頼すんなよ」
「……はっ？」

立ち止まって振り返った。
動きを停止させた此方に合わせるように、少年の足も止まる。
彼は何を考えているのか、虚空を眺めながら右手で頭を掻き、
「ようするに信じきれない奴に対して不用意に背中を向けたり、自分の家の場所なんか教えたりするなってことだよ。……それだけだ」
「……はっきり言うけど、アンタ頭壊れてる？　神経回路イかれた？」
「うるせぇ」

自分でもおかしなことを言っている自覚はあるのか、少年は否定の言葉を発しない。追求を逃れるかのように視線を逸らすだけだ。
気にくわないと、今度は心が素直にそう感じる。
だから、わざと顔をおもいっきり顰めて言ってやった。

「いきなり喋りかけて来たかと思ったら、家までついて行くから家の場所教えろとか言い出して、文句言ったら人攫いみたいに連行して行って、今現在も一歩後ろからストーカーみたいについて来てる男のセリフじゃないでしょ。まさしく『お前が言うな』ってやつよ」
「俺だってそれぐらい分かってるよ馬鹿。ようは『俺だからこそ』ってやつだ」

彼は視線を此方に、やけに真面目な顔で、
「その年で『特別生』、しかも結構な実力を持ってるのは分かる。だけどお前はガキだ。自分では分かってねぇかもしれねぇけど、お前はガキだ」
「……」

ガキガキ連呼されて非常に五月蝿いが、彼の真剣な瞳を見て沈黙

を続ける。
鋭い刃のような視線を飛ばし、彼は言葉を紡ぐ。
「力があるなら、俺っていう不審者に会った時点で逃げるなりすればよかった。けどお前は逃げも隠れもしないで、あまつさえ挑発じみた言動までしやがる。プラスその後のお前が言う人攫い行動に対しても、お前は本気の抵抗をしないで家の案内までし始めた。……もし話しかけたのが俺じゃなかったら、お前どうなってたか分からねぇぞ？　今の世の中、どんな奴が居るか分かったものじゃないしな」
「……まず、話しかけたのがアンタじゃなければ、それ等問題の殆どが起きない気がするんだけど……」
はぁ、と今度はあからさまにため息を吐いてやった。
面白いくらいに彼は眉を上げ、不機嫌そうになる。
目も細められ、睨むと表現すべき視線が突き刺さるが、構わなかった。
言葉を、叩きつける。
「自分じゃなかったら、なんて何度も何度も言ってるけど、ようは他の奴は危ないけど自分は大丈夫って言いたいの？　だから安心しろとでも？」
「……別にそういう意味で言った訳じゃねぇんだけど……、お前がそう思うならそれも含みでいいや。とにかく、今度から……いや、違うか。『今から』夜は特に気をつけろよ、まだガキなんだから」
そう言って彼は足を進める。
ガキという単語に嫌味を返そうとした此方の傍を通って、自分の家へと通じる道の方へ。自分よりも前へと。
置き去りにするようで、その実、動きは先導の気配を持っていた。

動きの理由は分かる。
つまり、
「……隙を見せないように、背中を不用意に向けるなってこと？」
「そういうことだ。改めて考えると、こっちの方が安心出来るだろ？　抱えられるよりも、後ろをついて来られるよりも。何故なら、背中を向けられるっていうのは相手が反撃をしにくいのに対して自分は攻撃がしやすいという、優位な立場だからだ」
さて、と彼は一息入れる。話は終わったとばかりに、お互いに背中を向けあったまま、一歩進む。
「お前の家が何処なのか、簡単に頼む。適当なとこまで言ったら俺も家に帰るし、今度からは俺みたいなお節介野郎か得体のしれない不審者に住所知られたくないなら夜中気をつけとけ」
台詞が切られた。どうやら彼の中で、『お前が言うな』説教タイムは終わったらしい。
自分は背中を向けているから、彼がどんな顔をしているのかは分からない。向こうも背を向けているから、自分の顔の表情は分からない筈だ。
だが、自分で自分のことは分かる。今心に浮かんだ感情も、先のとは違って言葉に出来る。比較的簡単に。
……何よ、それ。
この、思わず銃でもぶっ放してしまいたくなる熱の感情は。
「……じゃあ一つ聞くけど、アンタはなんでアタシに背を向けてるの？　夜道で背中を向けるのが不味いっていうのなら、アンタはど

うしてアタシに背を向けるのよ」
「そりゃ――」
「言っとくけど、アタシがガキだからとか、横に並ぶのが気恥ずかしいとかいう理由だったら速攻で叩き潰すから」
「何をだよ……」

何やら苦々しい、躊躇を含む言葉が返って、

「……譲歩だよ譲歩。背中向けた方が不利で危険なんだ。こっちが背中とってお前に警戒されるより、自分から背中向けた方が面倒も少ないだろうが」
「アタシから攻撃されるとは思ってないの？」
「一応これでも近接系統の『特別生』資格持ちだぞ？　不意打ちくらい対処出来るし、それに……」
「それに？」

おうむ返しに呟いて、身体を反転。彼の方へと、正面から向き直る。
対して少年は身体の向きを変えず、ただ此方へと背を向けて頭を掻いているだけだ。彼のブレザー型制服の真っ黒な背が、闇夜と同化しかけつつもなんとか視界に認識出来る。
彼は、言った。

「お前は、赤の他人を怪しいからっていう理由でいきなりぶっ飛ばすような奴じゃねぇだろ」

反射的に、あぁ、と呟きが漏れかける。
背中姿から感じる苦笑と照れの気配に、不思議と心が熱を持つ。
熱に、今度は逆らわない。

「……分かったわ」

言って、前に出た。

ズンズンと足を無駄に力を入れて進めて行くと、あっという間に立ち止まっていた少年を追い越し、彼に背を向ける形になる。

おい、と咎めの響きが、自分の背後となった空間から来た。

「お前何やって――」

「アンタと同じよ」

言葉を被せて、遮る。

顔は見えないが、顔に浮かんでいるであろう感情は予想出来る。

きっとそれは、困惑。そして困惑の理由は此方の行動。

ならば、と思う。

答えをあげてやる、と。

「……『特別生』で結構な実力があるのかもしれないけど、だけどアンタはバカよ。自分では分かってないのかもしれないけど、アンタはバカ」

「……」

呟く。背後に届くよう、声を大きくして、

「いきなり夜道を歩く赤の他人に話しかけて、自分が怪しいモノじゃないという証明すらしないで家までついて行くって言って、勝手に決めて人を荷物みたいに抱えて、更には無理矢理人の家まで案内させて。……アタシじゃなかったら、逆に犯罪者として捕まってもおかしくないわよ？　最近は性犯罪の法律も厳しいんだから」

「……」

背後からの響きは無い。
息を詰めるような沈黙だけが、其処にある。
当然だ。何故ならこれらの言葉は、ワザと彼の言葉と似せたのだから。少しは驚いてもらわないと、困る。
自分は彼からの沈黙に満足感で頷いてから、

「でもね」

首だけを振り向かせ、背後へと視線を向けた。
振り向いた先にあるのは、やはり困惑の顔を見せる少年。
予想が当たっていたこと、そしてその何処か間抜けそうな顔に、唇の端が釣り上がった。
無意識で笑みが表情に出るなど、いつ以来だろう。
感慨深い気持ちになりながら、唇を動かす。

「さっさと家に帰りたくて、その気持ちを隠そうともしないで、でも夜道を歩いてるガキが気になって、面倒だとか何で自分がとか思いながら、それでも知らないふりをするのは目覚めが悪くて、ガキだガキだ言って赤の他人を親みたいに心配して、似合わないと自分で思いながらも年長として色々馴れないこと説教して」

顔だけを後ろへとやる自分を見ている少年の顔が、困惑から驚愕へと移り変わって行く。まるで、冬の雪が春の風に溶かされて行くように。
彼の内心を正しく示す表情を見て思うのは、

……分かりやすいのよ、バカ。

バカ、ともう一度心中で紡いでから、
唇から声と言う名の意思を込めた空気の振動を、発生させる。

精一杯の、

「しかも、こっちを、出会ってから数分程度の相手を勝手に『攻撃しない』なんて信頼して」

態度と、

「アンタはそんなバカなお人好しだから、アタシが今まで見たことが無かったバカなお人好しだから」

笑顔で、

「アンタの行動と、言葉。それ等全部を含めて」

宣言。

「――アンタのこと信じてやるわ」

背中を向けるという、信頼の証たる状態で、言い終わった。

腰に手を当て、なるべく呆れたように言ったつもりだが、どうだろうか。自分は、今、それなりの威厳を保てる姿だろうか。

……いや、ダメだ。

と自分の夜風に靡く前髪と服を視界の端に収めて知る。前髪は茶色の色が分かるくらい輝いているし、服だって蛍光色ではない装飾の細かな色まで分かるくらい明るい。これでは、此方がどんな顔をしてるか相手に丸わかりだ。頬の朱色も、恐らくばれた。

よく見ると、頭上に浮かぶ月が青白い月光を太陽の如く撒き散らしている。先まで雲に隠れていた月が、今ようやく夜空に出て来たのだろう。
なんというタイミングの悪さだと舌打ちしたくなるが、逆にいいタイミングだと心が感情を打ち消し合い、相殺する。
なにせ月光のお陰で、放心状態となった少年の馬鹿顔をじっくりと見れたのだから。
それは、少年の前で無いのなら腹を抱えて笑える程の物で、顔に浮かぶ笑みが増す。
しかし少年は反応を見せない。ボーとした視線を、此方の顔へと釘付けにしているだけだ。

「……」
「……何よ」

暫しの沈黙の時間の後、問いかけた。
少年は放心状態のまま、未だに口を開けて馬鹿顔を晒している。
眉をひそめた。放心状態がやけに長い。自分のセリフはそこまで少年にとって驚くものだったのか。
否、恐らくそれだけではない。
一体どうしたのだと、問いをもう一度放とうとした時、彼が動いた。

「……いや、始めてだったからな」

目を細め、太陽を見るように、まぶし過ぎるモノを見るかのような目。
黒い優し気で儚げな瞳が此方の全てを捉える。やはりこの瞳も、自分が人生で始めて見るものだ。
自分は、逃げない。反射神経が羞恥という感情によって首を前に

動かしかけるが、意思で押さえ込んだ。
ここは逃げては駄目な場だ。彼に、問いという自分の知りたいという欲求を満たすための行為をしなければいけない場だ。
だから、自分は尋ねる。
変わらない、背中を向けた態度で。

「何がよ」

簡素な言葉に、彼はあぁと深夜の暗闇を月光がライトスポットのように照らす中、頷いて。

「――信じてやる、なんて言われたのがだよ」

言葉にどれだけの感情が含まれているのかを知るのは、苦手だ。
しかし、苦手だが、無知ということではない。故に分かる。彼が言った一言に、どれだけの感情と過去が押し込まれていたのかを。
自分が、彼に会って数分程度の自分が、そう簡単に触れてはいけない事柄だろうということも。

「……」

なので自分が出来ることは、彼から完全に背を向けることだ。
部外者が見てはいけない彼の顔から前へと、自分の家へと通じる道の先に視線を移す。
月光が照らす道を、一歩踏みしめ、

「……気持ち悪い顔してないで、早く行くわよ。きっちりエスコートしてくれるんでしょ？」

「あぁ」

返事と数瞬違わず、ついて来る彼の自分とは違う足音が鳴る。
心なしか、返事には先よりも力があった気がした。足取りも、軽い気がした。
それがもし、此方が信じていると言ったからなのだと思うのは、傲慢なのだろうか。

……どうなんだろう。

二人分の心地よい足音と、ひんやりと涼しい夜風、身を輝かせる月光を浴びながら、思考する。
出会ったばかりの彼のことをもっと知りたいと思うのは、自分がガキだからなのか。それとも、バカだからなのか。それとも、この数分の間に始めての連続で思考が麻痺しているからなのか。
そして、何よりも。
自分で、出てしまっている答えが一つだけある。

……我ながら、ガキっぽくて、バカっぽいわね。

――彼と自分が出会ったことを『運命』などと考えるのは、自分の中の言葉に出来ない感情の所為だということ。
月と星の夜空。風と信頼する者の音を聞きながら、つくづくそう感じた。

この時まだ西暦二〇〇八年。
誕生日もまだ来ていなかった、とある夏の夜のことだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7240y/

銃剣少年と双銃少女

2011年11月22日01時55分発行